様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０７３７

研究課題名（和文）アメリカ合衆国ノースカロライナ州ダーラム市の黒人コミュニティに関する研究

研究課題名（英文）African American Community in Durham, North Carolina

研究代表者
佐々木　孝弘（SASAKI, Takahiro）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：１０２２５８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：1900年においてノースカロライナ州ダーラム市に居住していたアフリカ系アメリカ人1,261家族（4,088人）を同じ地域に住む白人306家族（1,251人）と比較することによってアフリカ系アメリカ人家族の特徴を考察した。その結果、アフリカ系アメリカ人家族には、女性世帯主家族が多いだけでなく、家族の中に遠い親族や養子を含んでいたり、夫婦別居が普遍的に見られるなど、白人家族にはない特徴があることが判明した。これらの特徴は、彼らの移住のしかたや雇用のありかたと関係していることが考えられる。また、不安定な家族のもつ脆弱性を補完するために、アフリカ系アメリカ人コミュニティでは相互扶助の仕組みが作られた。

研究成果の概要（英文）：African Americans formed family patterns quite distinct from whites in Durham, North Carolina in 1900. This is evident from comparing 1,261 African American and 308 white families in this city. Not only were African American families more often female-headed than white familes, but a greater proportion of African American families included such relatively distant members as uncles, aunts, nieces, nephews and cousins. Some African Americans even adopted unrelated infants in their families. These characteristics were either the results of their migration patterns from surrounding rural communities or of their usually temporary employment practices prevalent in domestic working conditions. The temporary nature of their employment and living conditions fostered development of various community networks which supplemented fragility of the African American family in this city.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：アメリカ史　家族　人種　コミュニティ

１．研究開始当初の背景

(1) アフリカ系アメリカ人の家族に関する研究は、黒人奴隷制度の中で夫婦の絆が弱く母権主義的な家族が作られていた伝統を引き継いできたとする解釈（代表的なものとして、ダニエル・モイニハンの 1965 年の国務省報告書）と、黒人奴隷制度の中でも奴隷たちは基本的に父親と母親の両親の揃った父権の強い家族を維持してきたことを強調する解釈（代表的なものとしてハーバート・ガットマンの 1976 年の研究）の間で、揺れ動いてきた。そこでは、研究の焦点が奴隷制度をどう理解すべきかに当てられ、奴隷制度から解放されたあとアフリカ系アメリカ人がどのような家族を構築したかについては実証的な研究が行なわれることが少なかった。

(2) 研究代表者は、かつて「再建期アメリカ合衆国ノースカロライナ州における黒人解放民の家族形成に関する研究」と題する萌芽研究（平成 19 年～平成 20 年、研究課題番号 19652069）を行ない、この研究の調査の中で、ポール・C・キャメロン家の所有していた黒人奴隷（確認できる者だけで 192 組が夫婦関係をもっていたと考えられる）のうち、少なく見積もっても 78.4%に当たる 152 組が奴隷制度廃止後 5 年を経過した 1870 年になっても同じ相手と夫婦として生活を共にしていたことを確認した。奴隷制度廃止直後には、家族を維持したいと考えていた人たちが多かったことを示している。この人たちがその後世紀転換期から 20 世紀初頭にかけてどのような家族を構築して行ったのか、そのような家族のありかたがコミュニティの特徴とどのように関係しているのかを実証的に検証してみたいと考えた。

２．研究の目的

(1) 世紀転換期においてアフリカ系アメリカ人の家族が同じ地域に住む白人の家族との比較の上で、どのような特徴をもっていたのかを実証的に検証することがこの研究の第一の目的だった。家族構成のありかた、構成員の就労、居住の 3 点を重点項目として取り上げて、白人家族と比べてアフリカ系アメリカ人家族はどのような特徴があるかを考察した。

(2) なぜ上述の特徴をもった家族が作られたのかについて、アフリカ系アメリカ人たちの生活基盤になっていたコミュニティのありかたとの関連において、その意味を考察した。

３．研究の方法

(1) 調査の対象として、ノースカロライナ州ダーラム市を選んだ。1900 年のセンサス原票を使って、この都市最大のアフリカ系アメリカ人居住地域であるヘイタイを含む調査対象とし、この地域に居住するアフリカ系アメリカ人を 1,261 家族（4,088 人）、比較対象に使うために同じ地域に住む白人を 306 家族（1,251 人）抽出し、ひとりひとりについて性別、年齢、既婚か未婚か、世帯主との関係、職業などの基礎的なデータを採集した。これが今回の研究の基礎的なデータベースとなった。

(2) 「研究の目的」の(1)を達成するために、さらに隔年で出版されていたダーラム市人名録に当たり、1900 年から 1910 年まで上述のデータベースに収録されている人がダーラム市に居住し続けたかどうか、職業や就労について何らかの変化が確認できるかどうかを調査し、記録した。

(3) 「研究の目的」の(2)を達成するために、ノースカロライナ大学およびデューク大学に保存されている、ダーラム市と工業化に伴う農村から都市への人口移動に関連したオーラル史料を聞いて、移住の動機や移住後の生活についての語りを収集した。また、1890 年から 1915 年までに印刷されたダーラム市の地図を比較検討し、この時期のコミュニティの拡大の様子を確認した。

４．研究成果

(1) 調査対象地域におけるアフリカ系アメリカ人の家族は、世帯主の属性を基準に同じ地域に住む白人家族と比較すると、以下の２つの特徴が見られる。

①　女性世帯主家族が多いこと

②　単身世帯の割合が高いこと

(2) また、家族の構成員については、以下の４点の際立った特徴が認められる。

①　世帯主の叔父や叔母、甥や姪、従兄妹、あるいは従姉妹の子どもたちなど、通常の核家族の枠に入らない遠い親族を家族の中に含むことが多いこと

②　白人の家族にはめったに見られない「養子」を含む場合が見られること

③　夫婦が別居して生活している割合が白人家族の場合よりもはるかに高いこと

④　未婚の女性が自分の子どもと一緒に生活していることが白人では皆無であるのに対して、アフリカ系アメリカ人の場合にはかなりの割合で見られること

(3) 上述のアフリカ系アメリカ人の家族構成に見られる特徴は、ひとつには近隣の農村部からダーラム市へ移住してきたときの移住の形態が白人の場合と異なるために、作られたと考えられる。一般に白人家族が家族ぐるみで移住するケースが多かったのに対して、アフリカ系アメリカ人の場合には単身による移住が多く、しかもしばしば農村と都市の間を季節に応じて行き来しながら生活する

ことが多かった。親の都合によって、子どもを親戚の間で融通することが必要になる場合も多く起こった。このことが夫婦の別居を多く生み出したり、比較的遠い親戚が同居することが多くなったりした理由である。これは、オーラル史料の中で確認することができる。

(4) 農村から都市ダーラムへと移住した人たちの語りから浮かび上がってくる移住前後のアフリカ系アメリカ人タバコ栽培小作農家の家族の姿は、労働力の需要について季節変動が大きい中で、親戚の間で余剰労働力をやり取りしていたという事実である。ダーラム市におけるアフリカ系アメリカ人女性の労働市場のあり方が家族の流動性を一層高めることになった。子守りとして、また女中として、アフリカ系アメリカ人女性は人口が急増していたダーラム市内で働き口を見つけることは容易であったし、料理人や洗濯婦としての雇用は子どもを連れた女性にも働ける環境を提供してくれたからである。こうして、農家において余剰労働力となった女性たちは、しばしば農閑期に農家を離れてダーラムで生活した。これもオーラル史料の中で頻繁に語られている体験である。

(5) このように、アフリカ系アメリカ人の家族は家族構成員がいつ離れて生活しなければならないことになるか分からない状況で暮らしていたために、両親の死亡など親や親族の間で子どもの面倒を見られない状況が起こると、コミュニティが子どもを引き取って育てるということをすることもあった。これが「養子」の実態であると考えられる。

(6) 「養子」の事例だけではない。オーラル史料の語りの中には、家族の脆弱性をコミュニティの協力と助け合いで乗り切ったという話が多く出てくる。たとえば、病床に伏していた妻の看病や家事の手伝いに隣り町に住む兄弟姉妹は誰ひとりとして助けてくれなかったのに、職場の同僚が交代で看病をしたり衣服の洗濯をしたりしてくれたと言うのである。また、職場では、従業員やその家族に何かあったときのために役立てようと、少ない賃金の中からみんなが少しずつお金を出し合って基金を作っていたという話もある。このように、２０世紀初頭のダーラム市のアフリカ系アメリカ人コミュニティでは自発的な相互扶助の仕組みが住民たちの間で作り上げられていた。

(7) 1900 年にダーラム市に住んでいた住人のうち 10 年後の 1910 年になってもダーラム市に居住していた人の割合をアフリカ系アメリカ人と白人とで比較すると、白人の方がはるかに多く市内に留まっていることが判明した。白人の方が雇用が安定していたことに加えて、もともと家族ぐるみで移住してきた人の割合が多かったことなどが影響しているものと考えられる。アフリカ系アメリカ人の場合には、1900 年の段階でそもそも単身世帯で生活していた人たちが多く、特に単身で生活していた人たちの間で 10 年間の定着率が低かった。

(8) 職業や就労については、ダーラム市人名録の記載が不完全であるために、白人とアフリカ系アメリカ人の差異について、明確に指摘することは難しい。しかし、職業について何も記載されていないことがアフリカ系アメリカ人の場合の方が白人の場合よりも格段に多く見られることは、アフリカ系アメリカ人の雇用が不安定であり、短期的であったり、子守りや家事手伝いなど家庭内労働に従事していたりすることが原因であるように推定できる。

(9) これまで都市史研究は、主として都市の中に定住した人たちの歴史として記述されることが多かった。しかし、世紀転換期から 20 世紀初頭の人口が急増した時期におけるダーラム市の事例を見ると、この都市を形成した人たちは定住した人たちだけでなく、季節ごとに農村と都市を移動した移動労働者や数年の間この都市に住んでみたものの結局は他の場所へ移住して行った人たちを多数含んでいたことが分かる。今後の都市史研究は、消えていなくなった人たちの活動をも含めて都市の姿の変化を記述するようにしていかなければならない。

以上、(1)から(6)までについては、次の「５．主な発表論文等」の〔図書〕②『流動する〈黒人〉コミュニティ――アメリカ史を問う――』の第二章「外に向かって開かれた家族とコミュニティ――１９００年、ノースカロライナ州ダーラム市のアフリカ系アメリカ人たち――」の中で論じた。(7)(8)(9)の３点については、今後適切な形で活字にする予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 佐々木孝弘、財産管理権をめぐる女性の闘い――1868 年ノースカロライナ州憲法の制定とその意義――、アメリカ史研究、査読有、34 号、2011、36-52

〔学会発表〕（計 4 件）

① 佐々木孝弘、アフリカ系アメリカ人家事労働者の生きていた世界――奴隷制度廃止によって何が変わったのか――、アメリカ南部史研究会札幌部会（招待講演）、2012 年 10 月 27 日、札幌学園大学

② 佐々木孝弘、アフリカ系アメリカ人家事労働者の世界（1820 年―1840 年）――オーラル史料から浮かび上がってくる彼女たちの姿――、アメリカ南部史研究会（招待講演）、2012 年 6 月 23 日、共立女子大学

③ 佐々木孝弘、アフリカ系アメリカ人家族の特徴――ノースカロライナ州ダーラム市における 1900 年センサスのデータから――、東京外国語大学海外研究所研究会、2010 年 12 月 20 日、東京外国語大学

④ Takahiro Sasaki、The African American Family in the City of Durham, North Carolina (1900)、アフリカ系アメリカ人コミュニティ形成史研究会（招待講演）、2010 年 12 月 12 日、専修大学

〔図書〕（計 3 件）

① 吉田ゆり子、八尾師誠、千葉敏之編著、佐々木孝弘、ほか 15 名、画像史料論――世界史の読みかた――、東京外国語大学出版会、2014、176-180

② 樋口映美編著、佐々木孝弘、ほか 5 名、流動する〈黒人〉コミュニティ――アメリカ史を問う――、彩流社、2012、43-78

③ 石川照子、高橋裕子編著、佐々木孝弘、ほか 17 名、家族と教育（ジェンダー史叢書２）、明石書店、2011、303-304

６．研究組織

(1)研究代表者

佐々木　孝弘（SASAKI, Takahiro）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：１０２２５８７３